

Mahāvastu における文法の研究

—— 人称代名詞 mamato と mamātu について ——

平 林 二 郎

1. はじめに

インドの仏典は如何なる言語で作成されたのか。筆者はこの問題に関心を持ち研究を行っている。

今まで我々が目にした『般若経』（『八千頌般若経』）写本の大半は限りなくサンスクリット語に近い言語で書かれている。しかし、近年、ガンダーラ語で書かれた『般若経』写本が発見され、その写本は炭素による年代測定の結果、紀元前後のものであることが明らかとなった¹⁾。つまり、大乘仏教が形成された時代、もしくは形成されてさほど離れていない時代の『般若経』は、現在発見されている資料から、サンスクリット語ではなく地方の言語で書かれていた可能性が高いと考えられている。

上記は『般若経』研究の一例であるが、インドの仏典が如何なる言語で作成されていたかを解き明かすためには、このようにそれぞれの仏典ごとに作成年代、作成地域、伝承方法など複雑に入り組んだ背景を紐解いていく必要がある。

筆者はこの問題に取り組んだ第一人者が F. Edgerton だと考えている。彼は『八千頌般若経』²⁾・『十地経』³⁾・『ラリタヴィスタラ』⁴⁾・『マハーヴァストゥ (Mahāvastu, 以下 Mv)』⁵⁾・『法華経』⁶⁾などの仏典を参照し、これらで使用される言語についての研究を進めた。そして、彼はその研究成果として、北インドのとある地方で使用されていた方言がサンスクリットと不完全に混淆したものを Buddhist Hybrid Sanskrit (BHS) と名付け、その後、集大成ともいえる *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*⁷⁾ (BHSGD) を

出版しているのである。

しかし、この Edgerton による研究成果にはいくつかの問題が指摘されている。まず、Edgerton が仏典を研究する際に写本からの考察は行わず、当時出版されていた校訂本を使用しており、校訂の誤りが Edgerton の研究成果に反映されてしまっている点。次に、Edgerton が研究を行ったのは半世紀以上も前であるという点。つまり、この出版以降に多くの新資料が発見され、それに付随する研究成果が挙げられているのである。したがって、インドの仏典で使用されている言語の研究を発展させるためには、これらを踏まえて、改めて仏典を研究する必要があるのである。

2. 問題の所在⁸⁾

Edgerton は BHS という術語を生み出す際に、多くの北インドの仏典を参照しているが、これらの仏典のなかでも特に Mv を重視していた。これについては、Edgerton が著書である BHSGD や *Buddhist Hybrid Sanskrit Language and Literature*⁹⁾ などで Mv の紹介に多くの頁を割き、また Mv から他の仏典よりも多くの用例を挙げ文法の解説をなしていることなどから推測できる。

Buddhist Hybrid Sanskrit Language and Literature を見ると、Edgerton は Mv の2つの文献的な特徴に注目していたようである。まず、長行（散文）・偈頌（韻文）ともに方言が不完全にサンスクリット化された混淆語で書かれているという特徴。つぎに、Mv は小乗に属す仏典でありながら、大乘的な要素を含んだ極めて古い時代¹⁰⁾ の仏典であるという特徴である。つまり、Edgerton は語学的にも思想的にも Mv を重要な仏典と位置付けていたのである。

Mv 研究は É. Senart による校訂本¹¹⁾ 出版によって始まったといっても過言ではない¹²⁾。この校訂本は、Senart が当時入手可能であった Mv の紙写本 6 本 (A, B, C, L, M, N 写本)¹³⁾ を使用して校訂を行ったものである。しかし、この Senart の校訂本には現在の批判的研究にはそぐわない部分も散見される。その主な理由を2点挙げたい。まず、すべての写本の読みにしたがわず Senart が恣意的にテキストを校訂した部分がある点。つぎに、湯山明氏の

研究成果によって近年 Mv 唯一の貝葉写本 (Sa)¹⁴⁾ と貝葉写本の読みに劣らない読みを有する紙写本 (Sb)¹⁵⁾ の使用が可能となり、Mv のより古い伝承内容を明らかにできるようになった点が挙げられる。

このような Senart の問題点を解決することで、Senart の校訂本を用いて主に研究を進めた Edgerton の問題点を解決できる可能性がある。故に、筆者はこれらを踏まえ、Sa 写本と Sb 写本を中心に Mv の再校訂を進めており、これと並行して Mv で使用される BHS の用例を写本から収集し研究を進めている。

3.0.0. Mv で使用される人称代名詞 mamato と mamātu について

本稿は、北インドの仏典では Mv でしか使用されていない、Edgerton の BHSG § 20.25. 1st. abl. sg. で扱われる人称代名詞 mamato と mamātu について考察するものである。Edgerton の BHSG では mamātu の次に mamato という順で紹介がなされているが、本稿で考察する都合上、Edgerton とは逆の mamato, mamātu の順とした。

また、本来であれば Mv のすべての写本を比較して考察すべきであるが、本稿では Mv 唯一の貝葉写本 (Sa), Sa 写本に劣らない読みを有する Sb 写本、Senart が校訂の際に重視した B, C 写本¹⁶⁾ を用いて、mamato と mamātu を文法的に考察していきたい。

3.1.0. mamato の用例について

mamato という語形は Senart の Mv 校訂本において 2 回使用されている。Edgerton はこのうち 1 つを mamato の用例として紹介している。また、この用例とアショーカ王碑文の mamate (1st. abl. sg.) という用例が似た語形として使用されていることを挙げている。ここでは、この碑文で使用される プラークリット (Prakrit, 俗語) の mamate という用例、Pāli 文献で使用される mamato の用例を踏まえ、Mv で使用される mamato の用例を考察していきたい。

3. 1. 1. アショーカ王碑文で使用される mamate

Edgerton は mamato という語形を使用する根拠の 1 つとして、アショーカ王碑文で使用される mamate (1st. abl. sg.) を挙げている。まず、この mamate という語形を考察したい。

この mamate (1st. abl. sg.) という用例は Dhauli と Jaugada にあるアショーカ王の勅令を刻んだ碑文に使用されている。以下がこれらの該当箇所である。(各下線筆者。)

Dhaulti, Second Separate Rock-edict (*Inscriptions of Aśoka*¹⁷⁾, pp.98-99.)

4 (G) m[a]va ichha mama aṁteṣui[p]ā[p]unevu te iti
Devānaṁp[iy] [anu]v[i]g[ina] mamāye

5 hvevū ti svasevu cha sukhaṁmeva lahevu mamat[e] no

dukha[ṁ]h[e]va[ṁ] un[e]vū iti khamisati ne Devānaṁpiye

[aph]ākā ti e chakiye khamitave mama nimitaṁ [va] cha dhaṁmaṁ
chalevū

6 hidaloka palaloka[ṁ]cha ālādhayevū

Translation (*Ibid.* pp.99-100.)

(G) [This] alone is my wish with reference to the borderers, that they may learn that *Dēvānāṁpriya* that they may not be afraid of me, but may have confidence (in me); that they may obtain only happiness from me, not misery; that they [learn] this, that *Dēvānāṁpriya* will forgive them what can be forgiven; that they may (be induced) by me (to) practise morality; (and) that they may attain (happiness in) this world and (in) the other world.

Jaugada, Second Separate Rock-edict (*Ibid.* pp.116.)

5 (H) etākā [vā] me ichha [a]ṁtesu pāpuneyu lājā hevaṁ ichh[a]ti
anu[v]i[g]ina hve[yū]

6 mamiyāye [a]svaseyu cha me sukhaṁ[m]eva cha lahey[ū] mamate
[n]o kha[ṁ] hevaṁ cha pāpuneyu kha[m]i[sa]ti ne lājā

7 e s[a]kiye khamitave mamaṁ nimitaṁ cha dhaṁma[ṁ] chaley[ū] ti

hidalog[arñ] cha palalogañ cha ālādhayey[ū]

Translation (*Ibid.* p.117.)

(H) This alone is my wish with reference to the borderers, (that) they may learn (that) the king desires this, (that) they may not be afraid of me, but may have confidence in me; (that) they may obtain only happiness from me, not misery; (that) they learn this, (that) the king will forgive them what can be forgiven; that they may (be induced) by me (to) practise morality; (and that) they may attain (happiness) both (in) this world and (in) the other world.

*Inscriptions of Aśoka*¹⁸⁾ の著者 Hultzsch はこれらで使用される mamate を 1st. abl. sg. に分類している。また、この際に mama (1st. gen. sg.) の影響で 1st. instr. sg. が mamayā となるように、abl. の mamate が使用されたと解説している¹⁹⁾。つまり、サンスクリット語の通常の一人称の代名詞 mad- の変化ではなく、gen. の mama- をもとに格変化したとしているのである。

たしかに instr. については、この mama- をもとにした多くの用例²⁰⁾ が見られ、文法的な問題はないと考えられる²¹⁾。しかし、この mamate (1st. abl. sg.) という語形の使用には問題がある。Hultzsch はこの mamate について註で以下のように解説している。(*Inscriptions of Aśoka* p.100 footnote1.)

Here and at Jaugaḍa, Senart and Bühler wrongly read *mama* te (in two words) instead of *mamate*, which, as Kern recognized, corresponds to Prakṛit ablative *mamatto*. See *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1880. 380, 382, 383; *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften*, 1914. 868; Pischel's *Grammatik*, § 415f.

この Hultzsch の註に挙げられている箇所を考察してみたい。

Journal of the Royal Asiatic Society (1880, pp.379-394.) に掲載されてい

る H. Kern の 'On the Separate Edicts at Dhauli and Jaugada' という論文では、Kern がアショーカ王碑文で使用される mamate 部分をサンスクリット語に翻訳した際に mamate = matto としている。しかし、この部分に註や文法説明はなく、Kern は mamate を matto と翻訳したとしかわからない。

次に、Von Heinrich Lüders の 'Epigraphische Beiträge' という論文 (*Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften*, 1914, pp.831-868.) では、この該当箇所を Kern が abl. と見抜いていた²²⁾ と述べているが、ここでも、mamate が何故 abl. で使用されるか解説はされていなかった。

Pischel の *Grammatik der Prakrit-Sprachen*²³⁾ は一人称の代名詞についての変化表とその解説だけであり、このなかに mamate という語形は見られなかった。

つまり、Hultzsch が註で挙げた、Kern の論文も、Lüders の論文も、Pischel の解説も何故 mama- に接尾辞 -te を付加することで abl. となるか文法的な説明をしていないのである。

以上のことから、アショーカ王碑文で使用される mamate については、mama- という gen. の語形をもとに格変化をさせることは文法的に可能であるが、mamate という語形自体を abl. で使用する根拠は示されていないとわかった。

3. 1. 2. Pāli 文献に見られる mamato

Pāli 文献において mamato という語形は *Apadāna*²⁴⁾ と *Therī-gāthā-aṭṭhakathā*²⁵⁾ で使用されている²⁶⁾。これら *Apadāna* と *Therī-gāthā-aṭṭhakathā* において mamato という語形が使用される箇所は同一内容の偈である。以下がその用例である。(各下線筆者。)

テキスト (*Apadāna*: p.574.17-18. *Therī-gāthā-aṭṭhakathā*: p.84.15-16.)

Sakena ānubhāvena itthiṃ māpesi sobhaniṃ
dassaniyaṃ suruciraṃ mamato pi surūpiniṃ.

訳 (『譬喩経』²⁷⁾)

自らの威力によりて美はしき、見ま欲しき、よく輝きて我よりも美はしき女人を化作下し給へり。

ここで mamato という語形は比較の abl. として使用されている。

この該当部分以外に mamato という語形を使用している箇所は見つけれなかったが、12 世紀のミャンマーにおいて Aggavaṃsa によって著された文法書 *Saddanīti*²⁸⁾ においても、この mamato の用例が収録され詳しく解説されていることから、この用例は mamato が 1st. sg. abl. として使用されている根拠になると考えられる。

この他、Oberlies の Pāli 語文法²⁹⁾ でも mamato は一人称の代名詞変化として挙げられ、アショーカ王碑文の文法と同様に mama-, tava- という語形をもとに mamaṃ, tavaṃ, mamato といった格変化をすると述べられている。

以上のことから Pāli 文献において、用例は少ないが、1st. sg. abl. として mamato は文法的に使用できると考えられる。

3. 1. 3. Mv に見られる mamato の用例 (1)

Mv の Senart 校訂本において mamato という語形は 2 度使用されている。このうち Edgerton は mamato の用例として 1 箇所だけを挙げている。以下がその用例である。(各下線筆者。)

テキスト (*Le Mahāvastu*, vol.2, p.272.7-8. 各写本該当箇所 Sa: 202b4-5, Sb: 202a4-5, B: 192a6, C: 139b13-15.)

rājā śrutvā utkaṅṭhito evaṃ jāto || anaṅgaṇo gṛhpati mamato
apṛcchitvā anavalokitvā abahumānaṃ kṛtvā bhagavato sakāśam
upasaṃkrānto bhagavāṃ ca nimantrito || asādhumetaṃ ||

平岡訳³⁰⁾

王は〔それを〕聞くと、心を傷め、こう〔考えた〕。〈長者アナンガナは私に尋ねもせず、許可も得ず、〔私を〕蔑ろにして世尊のもとに近づき、世尊を招待しよったな！これは宜しくない〉と。

mamato となっている部分の各写本の読みは Sa 写本が mamātā pṛcchitvā, Sb, B 写本が mamato pṛcchitvā, C 写本が mama pṛcchitvā となっている。しかし、Sa 写本の文字は書写者が文字に熟達していないためか、さまざま

な文字で別の文字との混同が散見される。故に、この Sa 写本の読みである mamātā も、本来は mamato と書いてあった可能性がある。

また、Sa 写本が mamato であったとすれば、この該当部分では C 写本の読みだけが他の写本とは異なっている。この C 写本の読みによって試訳を行うと‘長者アナンガナは<私に尋ね、許可を得ず……>となる。したがって、この読みでは王に尋ねてはいるが、許可はされていないということになり文意には適さず、Sb, B 写本、Senart 校訂本のように mamato aprcchitvā として<私に尋ねもせず、許可も得ず……>とした方が文章構造としては適切であると考えられる。

次に統語論（動詞の格支配）の視点からこの用例を検討してみたい。mamato という語形に続く(°)prcchitvā と anavalokitvā はそれぞれ√prach と an-ava-√lok の絶対詞である。√prach は Monier によれば³¹⁾ ‘to ask or interrogate any one (acc.); to ask after, inquire about (acc.); to ask or interrogate any one (acc.) about anything (acc., dat., loc., *prati* or *adhikṛtya* with acc.; arthe or *hetoh* ifc)’などと説明されており、目的語としては acc. をとると記されている。次に an-ava-√lok についてである。an-ava-√lok は√lok に動詞前綴の ava- と否定の接頭辞 an- が付加されたものである。古典サンスクリットで使用される ava-√lok の意味は ‘to look upon or at, view, behold, see, notice, observe’ であるが³²⁾、平岡訳で anavalokitvā が ‘許可も得ず’ となっているように、BHS で avalokayati は ‘asks permission of (acc.)’ という意味で使用される³³⁾。

つまり、辞書を見る限りでは、√prach と an-ava-√lok はどちらも目的語に abl. をとらない動詞である。

ここで実際に Mv 内で√prach が如何なる格をとるのか確認してみたい。以下は√prach が該当用例と似た文脈で使用されている用例である。（各下線筆者。）

八

テキスト (*Le Mahāvastu*, vol.2, pp.111.18-112.1. Sa: 147b1, Sb: 145a8, B: 135a3, C: 104a7.)

ahaṃ tava premena anāprcchitvā mātāpitṛṇām ……

平岡訳³⁴⁾

私はお前に対する愛ゆえに、両親の許しを得ることなく、…

テキスト (*Le Mahāvastu*, vol.2, p.272.12. Sa: 202b6, Sb: 202a7, B: 192a8, C: 139b16.)

mama anāpṛcchiyāna nimantresi.

平岡訳³⁵⁾

お前は私に尋ねもせずに、〔世尊を〕招待したのであろう。

このように mātāpitrñāṃ (gen. pl.) と mama (gen. sg.) はどちらも gen. が使用されており, abl. が使用されている用例は見られなかった。また, ava-√lok を‘許可する’という意味で用いている用例は Mv においても該当用例だけであり, 他の用例は見当たらなかった。したがって, 統語論にそって考えれば, mamato は abl. の語形をとっているが, gen. で使用されていた可能性もあると考えられる。

3. 1. 4. Mv に見られる mamato の用例 (2)

Senart 校訂本で mamato という語形が使用されているのは, 上記 (1) と以下の用例の 2 箇所である。 (*Le Mahāvastu*, vol.2, pp.149.15-18., Sa: 161a5, Sb: 159a6-7, B: 148b9-10, C: 112b6-7. 偈番号および下線筆者.)

a 句: yadi śiṣyapratodamidaṃ na bhavet

b 句: yadi rājakulasya bhayaṃ na bhavet |

c 句: yadi sarvabhayaṃ tribhave na bhavet

d 句: abhiniṣkramaṇe mamato na ratiḥ || 7 ||

この部分の写本の読みは以下のようにになっている。(Senart 校訂本の読みを Se とする.)

Se: abhiniṣkramaṇe mamato na ratiḥ

Sa: abhiniṣkramaṇa eva mama tāta amṛtaṃ

Sb: abhiniṣkramaṇa eṣa mama tāta amṛtaṃ

B: abhiniṣkramaṇa evaṃ mama tāta amṛtaṃ

C: abhiniṣkraṇa evaṃ mama tāta amṛtaṃ

この部分を Sa 写本の読みから試訳すれば‘父よ、まさに我は出家において不死を得る’となる。

Senart はこの d 句部分を上記のように校訂しているが、このような読みを支持する写本はない。Edgerton は Senart の校訂が恣意的であることから、これを考慮し BHSG においてこの用例を収集しなかったと考えられる。したがって、写本から考察を行うと、この用例は mamato の 1st. sg. abl. の用例としてはふさわしくないと考えられる。

3. 1. 5. mamato の用例についてのまとめ

アショーカ王碑文で使用される mamate という用例は 1st. abl. sg. として使用されていると断定するには問題がある。しかし、instr. で mamayā という語形などが使用されていることから、mama- (gen.) をもとにした格変化をすることは認められる。Pāli 文献では用例は少ないが、mamato の使用が文法書でも紹介されており、使用に適すると考えられる。Mv で使用される mamato については、Mv 唯一の貝葉写本の読みには問題があり、語形的には 1st. abl. sg. であるが、統語論から考えれば mamato を gen. として使用していた可能性もあると考えられる。

また、Senart は Mv 校訂の際に 2 度 mamato という語形を使用しているが、一箇所は写本による支持がなく、mamato の用例として収集するには問題があると判断した。

3. 2. 0. mamātu の用例について

Edgerton は、Mv において mamātu という語形が 4 回使用されていることを指摘している。まず、この mamātu が使用される用例全文を紹介したい。(この部分はシュッドーナ王が息子のシッダールタに出家を止めるようにいい、それでもシッダールタは王に出家したいと申出る部分である。)

テキスト (Le Mahāvastu, vol.2 pp.148.11-149.18. 各写本該当箇所 Sa:

gatiṣu santrastamānaso śṛṇohi
mama tāta me yena na asti ratiḥ |
jarāvyādhi ripur maraṇaṃ ṛtīyaṃ
abhimardati tena me nāsti ratiḥ || 1 ||
yadi nityasukhaṃ ātumano bhave
yadi vātmano duḥkhabalaṃ na bhave |
yadi saṃskṛtapratyayam idaṃ na bhave
atha kisya mamātu ratir na bhave || 2 ||
upalabhyati kāyo karaṇḍasamo
upalabhyati kāye ca sarpasamā |
upalabhyati skandha amitrasamā
atha kisya mamātu ratir va bhave || 3 ||
yadi kāyo karaṇḍasamo na bhavet
yadi vā tatra sarpasamā na bhave |
yadi skandha amitrasamā na bhave
atha kisya mamātu ratir na bhavet || 4 ||
yadi
.....³⁶⁾ duḥkhakriyā na bhavet |
yadi jātijarāmaraṇaṃ na bhavet
atha kisya saṃsāraratirna bhavet || 5 ||
yadi śūnyagrāmanilayo na bhave
yadi taṃ virāgavadhako na bhavet |
saṃskāradhātu samayo na bhavet
atha kisya mamātu ratir na bhavet || 6 ||
yadi śiṣyapratodamidaṃ na bhavet
yadi rājakulasya bhayaṃ na bhavet |
yadi sarvabhayaṃ tribhave na bhavet
abhiniṣkramaṇe mamato na ratiḥ || 7 ||

平岡訳³⁷⁾ (偈番号および下線筆者.)

「〔六〕趣にて心脅かさる者は聞くべし。父よ、我に喜びなし。老や病、更に三には死なる敵の我を押し潰さんとする故に、我に喜びなし。|| 1 || もし常住なる樂の〔我〕自身にあり、もし苦の力なく、もし有為なる縁なしとせば、如何が我に喜びなからん。|| 2 || 体は竹の如くに〔中身なく〕、体は蛇〔の脱皮〕の如くに見ゆるなり。〔五〕蘊は敵に等しく思われる。何が故に我に喜びあらん。|| 3 ||

もし体の竹の如からず、もしそれ(体)の蛇〔の抜けし皮〕の如からず、もし〔五〕蘊の敵に等しからずとせば、その時、如何ぞ我に喜びなからん。|| 4 || もし(…)苦の働きなく、もし生・老・死なしとせば、その時、如何ぞ輪廻を喜ばざらん。|| 5 || もし空の村や家なく、もし離貪を破壊するものなく、有為の〔世〕界の恐れを伴わざるものならば、その時、如何ぞ我に喜びなからん。|| 6 || もし怒りの突棒なく、もし宮殿への恐れなく、もし三有に一切の恐れなしとせば、我は出家を喜ばざらん || 7 ||」

上記の第2, 3, 4, 6偈でそれぞれ mamātu という語形が使用されている。Senart は、この1~7偈に韻律上の問題があることを指摘している³⁸⁾。しかし、この該当部分の d 句だけを見れば1~7偈とも韻律は Toṭaka が使用されている。また、この第7偈は本論文 3.1.4. で考察した用例でもある。以下ではこれら各偈該当部分について考察していきたい。

3. 2. 1. 第2偈について

まず、第2偈の mamātu が使用される d 句部分の読みを比較してみたい。以下は Senart の校訂本(以下 Se)と Sa, Sb, B, C 写本の該当部分の読みである。(下線筆者.)

Se: atha kasya mamātu ratir na bhave

Sa: artha kasya mamātu ratir na bhave

Sb: arthaṃ kasya mamātra ratir na bhave

B: arthaṃ kasya mamātu ratir na bhave

C: atha kisya mamātu ratir na bhavet

この第2偈で問題となるのは下線部分の *mamātu*, *mamātra* という写本の読みである。各読みのはじめの単語 *atha*, *artha(m)* という読みにも問題があるが、ここでは *mamātu* を問題としていることから別の機会ですくしく考察したい³⁹⁾。

① *mamātu* が gen. で使用された可能性。Senart は第2偈の *mamātu* について、*mamātu* と *mamāto* は音階 (u と o) に違いはあるが接尾辞 ‘-taḥ’ によるものと見なしており、また *mamātu*, *mamāto* と *mama* (1st. gen. sg.) は同じようであると註釈している⁴⁰⁾。この見方については、Mv の英訳を行った J. Jones も第2偈 d 句を ‘there would be no reason why I should not find pleasure.’⁴¹⁾ と訳しており、註釈でも ‘Literally, “then why should I have no pleasure?” *atha kisya mamātu* (= *mamāto* = *mama*) *ratir na bhave*.’⁴²⁾ と述べており、*mamātu* を Senart 同様に gen. と考えていたことがわかる。

しかし、この *mamātu* という語形については、Pischel の *Grammatik Der Prakrit-Sprachen*⁴³⁾ § 415 においてパイシャーチー (Paiśācī) 語で使用される 1st. abl. sg. として紹介されているが、gen. の用例を記載しているものはない。

本論文 3.1.3. において、統語論から *mamato* を考察した場合、*mamato* は abl. の語形ではあるが、gen. として使用されている可能性があるとして述べた。この *mamātu* についても本来 *mamato* であったものが韻律によって⁴⁴⁾ *mamātu* になったと推定すれば、*mamato*, *mamātu* ともに gen. で使用されていた可能性を示す根拠が増えると考えられる。

② *mamātu* が ‘*mamā tu*’ であった可能性。Edgerton は Mv で使用される *mamātu* について、‘*mamā tu*’ と読む可能性があるとして指摘している⁴⁵⁾。

たしかに単語を分解して *mamātu* を *mamā tu* と読む可能性については、韻律の影響で *mama* が *mamā* となり、次に接続詞の *tu* が続いたと考えることができる。しかし、この部分を *mamā tu* として試訳すると以下ようになる。

もし常住なる樂の〔我〕自身にあり、もし苦の力なく、もし有為なる縁なしとせば、しかし如何が我に喜びなからん。

永遠の安楽があり、苦がなく、有為なる縁がなくなるのは、喜ばしいことであり、ここに逆説の接続詞‘しかし (tu)’を用いる必然性はないと考えられる。

③ mamātu が mamātra であった可能性。この他、Edgerton は mamātu 部分が mamātra となっている読み（本論文 3.2.4. などの読み）についても触れている⁴⁶⁾。この第2偈では Sa, B, C 写本は mamātu となっているが、Sb 写本のみ mamātra となっている。この部分を mamātra (: mama+atra) として試訳すると以下ようになる。

もし常住なる楽の〔我〕自身にあり、もし苦の力なく、もし有為なる縁なしとせば、如何がそこで我に喜びなからん。

この場合は mama+atra の atra はそこで (therein) という副詞であり、文の内容を混乱させることはない。また、この Sb 写本は Mv 唯一の貝葉写本である Sa 写本に劣らない読みを有していると湯山氏によって位置付けられている⁴⁷⁾。これについては、筆者は過去に Sb 写本を扱って文法的な考察を行ったことがあり、その際も Sb 写本は優れた読みを有していた⁴⁸⁾。したがって、mamātra の読みを支持している写本はこの Sb 写本だけではあるが、この読みは無視できないものである。

④ mamātu が mamātra の誤写である可能性。本論文で扱っている mamātu と mamātra という語形の各最後の文字 ‘tu’ と ‘tra’ は写本によっては判別が不可能な程に似た場合がある。Mv 唯一の貝葉写本である Sa 写本にもこのような誤りが散見される。したがって、この Sa 写本の読み mamātu は mamātra であった可能性も考慮する必要がある。

3. 2. 2. 第3偈について

第3偈の d 句の読みはそれぞれ以下のようにになっている。(下線筆者.)

Se: atha kisyā mamātu ratir va bhavē

Sa: atha kisyā mātu ratir na bhavē

Sb: atha kisyā mamātu ratir na bhave

B: atha kisyā mamātu ratir na bhave

C: atha kisyā mamātu ratir na bhave

第3偈で問題となるのは Sa 写本の読みである mātu 部分と、すべての写本の読みが否定の na であることに対し、Senart はこれを va (eva)⁴⁹ と校訂していることについてである。

この第3偈 d 句で使用されている韻律は Toṭaka (: ◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ ◡ —) であると考えられる。Sa 写本の読みである atha kisyā mātu ratir na bhave (◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ ◡ — ◡ ◡ —) では1音節足りなくなることから、この mātu (— ◡) という読みは問題があると考えられる。また、語形から mātu を mātṛ- (f. 母親) の sg. gen.⁵⁰ とする可能性も考えられるが、出家をする理由を述べている該当部分で突如、“何が故に母に喜びあらん”と述べることは文意に適さないと考えられる。したがって、韻律と文意を考慮すれば mamātu の方が読みとして適当である。

次に d 句下線部 na と va についてである。第3偈の平岡訳は「体は竹の如くに〔中身なく〕、体は蛇〔の脱皮〕の如くに見ゆるなり。〔五〕蘊は敵に等しく思わる。何が故に我に喜びあらん」となっている。次の第4偈は「もし体の竹の如からず、もしそれ(体)の蛇〔の抜けし皮〕の如からず、もし〔五〕蘊の敵に等しからずとせば、その時、如何ぞ我に喜びなからん」となっている。第3偈を Sb などの写本の読み (na bhave) に合わせ「体は竹の如くに〔中身なく〕、体は蛇〔の脱皮〕の如くに見ゆるなり。〔五〕蘊は敵に等しく思わる。如何ぞ我に喜びなからん」と読むことも可能ではあるが、第3偈が肯定文で述べられているのに対して、第4偈は否定文で述べられている。この整合性を見れば文章の構成としては Senart の校訂が正しいように考えられる。

3.2.3. 第4偈について

第4偈の d 句の読みはそれぞれ以下のようになっている。(下線筆者。)

Se: atha kisyā mamātu ratir na bhavet

Sa: atha kisyā samānaturir na bhavet

Sb: atha kisyā mamātra ratir na bhavet

B: atha kisyā mamātu ratir na bhavet

C: atha kisyā mamātu ratir na bhavet

第 4 偈では Sa 写本が samānaturir, Sb 写本が mamātra ratir, B, C 写本が mamātu ratir となっている。しかし、この Sa 写本の読みである samānaturir では意味が通じない。したがって、この Sa 写本の読みは Sb 写本の読みである mamātra, もしくは B, C 写本の mamātu という読みの誤写である可能性が高い。

3.2.4. 第 6 偈について

第 6 偈の d 句の読みはそれぞれ以下のようにになっている。(下線筆者.)

Se: atha kisyā mamātu ratir na bhavet

Sa: atha kisyā mamātra ratir na bhavet

Sb: atha kisyā mamātra ratir na bhavet

B: atha kisyā mamātu ratir na bhavet

C: atha kisyā mamātra ratir na bhavet

第 6 偈においては B 写本のみが mamātu となっており、他のすべての写本の読みが mamātra となっている。

3.2.5. mamātu の用例についてのまとめ

第 2, 3, 4, 6 偈を写本の読みという点から考察すると, Sa 写本の読みは mamātu, mātu, samānaturir, mamātra とそれぞれの偈で読みが異なっている。Sb 写本は第 3 偈を除くとすべてが mamātra と書写されており, 第 3 偈だけが mamātu となっている。B 写本はすべての偈で mamātu となっており読みの統一がとれている。C 写本は第 6 偈以外 mamātu となっており, 第 6 偈は mamātra となっている。

これを表にすると以下ようになる。

	第2偈	第3偈	第4偈	第6偈
Sa 写本	mamātu	mātu	samānaturir	mamātra
Sb 写本	mamātra	mamātu	mamātra ratir	mamātra
B 写本	mamātu	mamātu	mamātu ratir	mamātu
C 写本	mamātu	mamātu	mamātu ratir	mamātra

Sa 写本では第2, 3, 4, 6 偈のすべての読みが異なっており, mātu や samānaturir といった文意に適さないものも見られる. Sa 写本が現在利用できる Mv 唯一の貝葉写本であることから, Sa 写本が書写される以前の段階で, この Mv 該当部分に関しては読みの問題があった可能性がある. もしくは Sa 写本には書き間違いなどが多く含まれていることから, Sa 写本の筆写者がこの該当部分を誤写した可能性も考えられる.

次に第2偈で考察を行ったように, Edgerton が指摘する各写本に見られる mamātu という読みを mamā tu と分解し理解するのは文意に反することからふさわしくない.

Sb 写本に多くの読みに見られる mamātra という読みは, 内容にも適し, Sb 写本の読みの信頼性の高さを考慮すれば, Mv を考察する上で外せない読みの1つとなると考えられる.

また, mamātu は本論文 3.1. で扱っているように mamato が韻律によって変化したものであると考えれば abl. の語形をした gen. として BHS の用例に記載すべきものになると考えられる.

4. おわりに

以上, 本稿では人称代名詞 mamato と mamātu という語形を中心に考察を行った. 再整理するなら, **本論文 3.1.**, mamato という語形は, mama- という gen. をもとに接尾辞 '-tas' を附加した 1st. sg. abl. の形をしたものである. たしかにこの mamato という用例は Pāli 文献には見られるが, 北インドの仏教文献で使用されるのは Mv のみであり, しかも使用される用例は少

ない。また、mamato が使用されている部分について、Mv 内の他の似たような用例を統語論（動詞による格支配）によって考察すると、abl. ではなく gen. が使用されていることがわかった。したがって、mamato は abl. の語形をしているが gen. として使用されている可能性もあると判断した。

次に**本論文 3.2.**、mamātu という語形は先行研究では mamātu (1st. sg. abl.), ‘mamā tu’, ‘mamātra (: mama+atra)’などと考えられてきた。しかし、この用例は Mv 唯一の貝葉写本である Sa 写本の読みが、各偈で異なっていることから、伝承される早い段階で問題があったと考えられる。多くの写本の読みである ‘mamā tu’ は文意から考えれば問題がある。‘mamātra (mama+atra)’ という読みは貝葉写本に劣らない読みを有する Sb 写本に多く見られ、文意にも適する。故に、この読みは Mv を考察する上で外せないものである。また、mamātu という写本の読みを活かす場合は、**本論文 3.1.**の mamato が 1st. sg. gen. で使用されていた可能性を考慮すれば、この mamātu も mamato が韻律の制限によって mamātu と変化した可能性があり、mamātu も 1st. sg. gen. で使用されていたとも考えられる。したがって現状の資料から、mamātu が mamātra の誤写であった可能性と、mamātu という語形は abl. のかたちではあるが、実際は gen. として使用されていたという可能性があると考えられる。

本稿で扱った mamato と mamātu という代名詞は、Edgerton の BHSG では僅かな説明しかなされていない項目である。しかし、Mv の最新資料や Edgerton の出版後に挙げられた研究成果を用いることで、新たな多くの事実を明らかにすることができた。

Mv を改めて写本から考察し、そこで使用される BHS の用例から文法体系を構築する研究は緒に就いたばかりであるが、このような研究を進めることで将来的にインドの仏典が如何なる言語で書かれていたかを明らかにできればよいと考えている。

註

- 1) 松田和信, 「アフガニスタン写本からみた大乘仏教——大乘仏教資料論に代えて」, 『大乘仏教とは何か』シリーズ大乘仏教 第1巻, 春秋社,

- 2011, pp.166-169.
- 2) Edgerton が使用した『八千頌般若経』校訂本. Rajendralala Mitra, *Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā*, Calcutta, 1888.
 - 3) Edgerton が使用した『十地経』校訂本. Rahder, *Daśabhūmikasūtra*, Paris and Louvain, 1926.
 - 4) Edgerton が使用した『ラリタヴィスタラ』校訂本. Lefmann, *Lalitavistara*, Halle, 1902.
 - 5) Edgerton が使用した『マハーヴァストゥ』校訂本. É. Senart, *Le Mahāvastu*, vol.1-3, Paris, 1882, 1890, 1897.
 - 6) Edgerton が使用した『法華経』校訂本. Kern and Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīka*, Petersburg, 1912.
 - 7) Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven, 1953.
 - 8) この問題の所在については拙稿である「Mahāvastu 再校訂の試みと仏教梵語研究」(平林二郎, 『佛教文化学会紀要』, 19, pp.79-94, 2011) で詳細に述べており, 本稿では必要最低限の内容を紹介したい.
 - 9) Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Language and Literature*, Banaras, 1954.
 - 10) ヴィンテルニッツは“しかし, 本書 (Mv) の核心は古く, たとえ四世紀に増広されたりまたおそらくその後付加や挿入があったとしても, おそくとも紀元後二世紀には原型ができていたにちがいない”と指摘している。(ヴィンテルニッツ著, 中野義照訳『仏教文献——インド文献史——第3巻』日本印度学会, p.190, 1978. また, 下線部は筆者が補った.)
 - 11) Cf. footnote5.
 - 12) Senart による校訂本出版以前に Rajendralala Mitra の *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal* (Calcutta, 1882.) によって, Mv の内容は紹介がなされているが, 多くの Mv 研究は Senart の校訂本出版後に行われており, 現在でも Mv 研究を行う際は, この校訂本が主に使用されている.
 - 13) Senart が校訂に使用した6写本は以下である.

A = Société Asiatique, Paris: No.9.

B = Bibliothèque Nationale, Paris: No.87-88-89.

C = University of Cambridge: Add.1339.

L = Royal Asiatic Society, London: No.9.

M = Collection Minayeff: Bibliothèque Nationale, Paris: No 1544.

N = Bibliothèque Nationale, Paris: No.90-91-92.

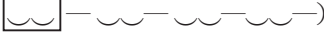
- 14) Akira Yuyama, *The Mahāvastu-Avadāna In Old Palm-Leaf and Paper Manuscript, I. Palm-Leaf Manuscripts*, The Centre for East Asian Culture Studies for Unesco, Bibliotheca Codicum Asiaticorum15, The Toyo Bunko, 2001. Sa = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin: No. PSB2.
- 15) Akira Yuyama, *The Mahāvastu-Avadāna In Old Palm-Leaf and Paper Manuscript, II. Paper Manuscript*, The Centre for East Asian Culture Studies for Unesco, Bibliotheca Codicum Asiaticorum15, The Toyo Bunko, 2001. Sb = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin: No. PSB30. また Sb 写本の詳細な研究については湯山明「*Mahāvastu-Avadāna*——原典批判的研究に向けて——（—— Towards a New Critical Edition ——）」（『国際仏教学高等研究所年報』2, 1999, pp.33-34.）を参照されたい。
- 16) Cf. footnote13.
- 17) E. Hultzsch, *Inscriptions of Aśoka*, Oxford, 1925.
- 18) *Ibid.* footnote17.
- 19) The ablative mamate for Skt. *mattaḥ* is, like the instrumental *mamayā*, due to the influence of the genitive mama. (E. Hultzsch, *Inscriptions of Aśoka*, p.cvi.)
- 20) *Inscriptions of Aśoka* (Cf. footnote15.) , pp.lxxviii, cvi, cxviii.
- 21) この他, Oskar von Hinüber, *Das ältere Mittellindisch im Überblick* (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 1986, p.158, § 368.) にもこれらを扱った項目がある。
- 22) *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der*

- Wissenschaften*, 1914, p.868.
 ‘Seltsam ist, daß sowohl Senart wie Bürler *mama te* als zwei Wörter lesen, obwohl der Genitiv nicht zu konstruieren und das *te* ganz überflüssig ist. Kern hatte längst als *mamate* ablativ = Sk. *mattoḥ* erkannt.’
- 23) R. Pischel, *Grammatik der Prakrit-Sprachen*, Strassburg, 1900, p.292.
 24) Mary E. Lilley, *The Apadāna*, part II, PTS, Oxford, 2000.
 25) E. Müller, *Paramatthadīpanī Dhammapāla’s Commentary on the Therīgāthā*, London, 1893.
 26) Pāli 文献で mamato という語形を探す際に、*A Critical Pāli Dictionary* (V. Trenckner, ed. D. Andersen et al., Copenhagen, p.530, 1924~.) を参照した。
 27) 『南伝大蔵経』, 第 27 卷, 小部經典 5, 大正新脩大蔵経刊行会, 1940, 再版 1972, p.454.12-13.
 28) Helmer Smith, *Saddanīti*, part III, London, 1930, reprint Oxford, 2001, p.680.15-23.
 29) Thomas Oberlies, *Pāli: A Grammar of the Language of the Theravāda Tipiṭaka*, Berlin, 2001, p.181.
 30) 平岡聡, 『ブツダの大いなる物語』 下巻, 大蔵出版, 2010, p.13.8-9.
 31) Monier Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899, p.658.
 32) *Ibid.* footnote 31, p.103.
 33) BHSD, *avalokayati*, p.74.
 34) 平岡聡, 『ブツダの大いなる物語』 上巻, 大蔵出版, 2010, p.344.7.
 35) 平岡聡, 『ブツダの大いなる物語』 下巻, 大蔵出版, 2010, p.13.11-12.
 36) *yadi* (.....) *duḥkhakriyā*, この (.....) 部分は写本の読みには書かれていないが, Senart が韻律からこのような配置になると想定したものである。
 37) 平岡聡, 『ブツダの大いなる物語』 上巻, 大蔵出版, 2010, p.376.4-12.
 38) ‘Les inorrections métriques qui restent dans cette strophe seraient en grande partie faciles à éliminer, plusieurs par de simples artifices

d'orthographe.' (*Le Mahāvastu*. vol.2 p.525, Page 148, Ligne 11.)

39) Senart は、この 1～7 偈に韻律上の問題があることを指摘している。

しかし、この該当部分の d 句だけを見れば 1～7 偈とも韻律は Toṭaka が使用されている。

韻律を基準とし *atha*, *arthaṃ* 部分を見ると、Sb, B 写本の読みは *arthaṃ* (—) ではじまっていることから、Toṭaka (: ) に適さないと考えられる。

Sa 写本の読みである *artha* を nom. sg. n. (BHSG § 8.31, 34.) とし試訳すれば、‘如何が我に目的と喜びなからん’となり、この読みでも文意には適すると考えられる。

また、この第 2～6 偈 d 句のはじめに *atha* と *artha(ṃ)* という写本の読みが見られるのはこの第 2 偈だけである。ここから導き出される可能性は以下の 3 つである。I. すべての偈が *atha* ではなく *artha* で始まっていた可能性。II. すべての偈が *artha* ではなく *atha* で始まっていた可能性。III. 写本の読みのように第 2 偈だけ *atha* と *artha* 両方が使われていた可能性である。この点については現在の資料からはこれ以上の検討は不可能であり、現状としてはこの (1)～(3) の可能性があることのみ留めておきたい。

40) ‘Je considère *mamātu* comme = *mamāto*, une forme allongée au moyen du suffix *taḥ*, qui serait prise comme équivalent de *mama*.’ (*Le Mahāvastu*. vol.2 p.525, Page 149, Ligne 2.)

41) J. Jones, *The Mahāvastu*, vol.2. London, 1952, p.144.16-17.

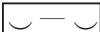
42) J. Jones, *The Mahāvastu*, vol.2. London, 1952, p.144, footnote4.

43) R. Pischel, *Grammatik der Prakrit-Sprachen*, Strassburg, 1900, p292.

44) Senart の読みと使用されている韻律 (Toṭaka) を挙げれば以下のようになる。

atha kisya mamātu ratir na bhava

— —  — — —

この  という韻律に合わせるために *mamato* (— —) が *mamātu* (— —) に変えられた可能性がある。

- 45) BHSG において以下のように解説している。(BHSG § 20.25. p.110. 下線部分は筆者が付加した.)
 “In a line of verse repeated four times Mv ii.148.18; 149.2, 6, 14 (本稿該当部 2, 3, 4, 6 偈) , Senart assumes *mamātu* = Pkt. *mamāo*, abl. sg. But a gen., not abl., is needed here. Probably read *mamā* (= *mama*, m.c.) *tu ratir na bhavet*, ‘but I should find no pleasure’.”
- 46) Edgerton は BHSG において以下のように解説している。(BHSG § 20.25. p.110. 下線部分は筆者が付加した.) “In 149.14 (本稿該当部第 6 偈) one ms. reads *mamātra*; If this reading were adopted the sense would be, ‘I should find no pleasure therein (*atra*) ’.”
 ここで第 6 偈が挙げられているのは, Senart の校訂本において *mamātu* という語形が最初に使用される箇所だからである.
- 47) Cf. footnote 15.
- 48) 拙稿を参照. 「*Mahāvastu* における人称代名詞の一考察」, 『印度學佛教學研究』, 59-1, pp.187-190, 2010. 「*Mahāvastu* 再校訂の試みと仏教梵語研究」, 『佛教文化学会紀要』, 19, pp.79-94, 2010.
- 49) va (2) BHSD p.466.
- 50) BHSG § 13.21. Stems in *-u* for *-ṛ*, および § 13.39. Gen. sg. *-u*.

略号

abl. : Ablative

BHS : Buddhist Hybrid Sanskrit

BHSGD : *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*

gen. : Genitive

instr. : Instrumental

Mv : *Mahāvastu*

sg. : Singular

1st. : first person

その他の参考文献

- B. C. Law, *A Study of the Mahāvastu*, Calcutta-Simla, 1930. Reprint Bharatiya Publishing House, 1978.
- 平等通昭, 『印度仏教文学の研究』第二巻, 第三巻, 印度学研究所, 1973, 1983.
- 白石真道仏, 『白石真道仏教学論文集』, 京美出版社, 1988.
- 水野弘元 『経典——その成立と展開』, 佼成出版社, 1990.
- 藤村隆淳, 『マハーヴァスツの菩薩思想』, 山喜房, 2002.

その他の参考論文

- 辻直四郎, 「Edgerton 氏「仏教梵語文法・辞典」「仏教梵語読本」」, 『東洋学報』, 36-2, 1953.
- 湯山明 「仏教文献学の方法試論」『水野弘元博士米寿記念論集 パーリ文化学の世界』春秋社, pp.125-152, 1990.
- 湯山明 「Edgerton の仏教梵語研究の学史的背景」(『渡邊文磨博士追悼記念論文集 原始仏教と大乘仏教』永田文昌堂, pp.45-84, 1993.
- 岡野潔, 「マハーヴァスツの形成についての試論(1)」『知の邂逅 仏教と科学——塚本啓祥教授還暦記念論文集』塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会, pp.276-280, 1993.
- 平岡聡, 「Mahāvastu-avadāna の内容」『佛教大学佛教学会紀要』, 第8号, 2000.
- 平岡聡, 「Mahāvastu-avadāna の構造」『佛教研究』, 第29号, 2000.
- 山崎守一, 「中期インド・アリアン語」(『インド哲学仏教学への誘い』菅沼晃博士古希記念論文集刊行会, pp.307-309, 2005.

参考 Home Page

- 岡野潔, 『インド仏教文学研究史1: 仏伝 Mahaavastu 研究史』
 URL: <http://homepage3.nifty.com/indology/mahavastu.html>
 註: <http://homepage3.nifty.com/indology/mahavastu-note.html>

平林二郎氏 学位請求論文要旨（課程博士）

「Mahāvastu における文法の研究」

『マハーヴァストゥ (*Mahāvastu*: 以下 Mv)』は小乗の部派に属する仏典でありながら、大乘的な要素が見られることから仏教の思想を研究する上で重要な位置におかれている。しかし、Mv 研究で主に使用されているテキストは百年以上も前にスナールによって校訂されたものであり、その校訂方針が現在の批判的研究に適さない点や、校訂本出版後に Mv に関する多くの新資料が発見されているなどの点から再校訂の必要が指摘されている。

また、Mv はエジャートンによって Buddhist Hybrid Sanskrit (:BHS, 仏教混淆梵語) という術語が創出された際に重要な役割を果たしており、インドの仏典を語学的に研究する際にも欠かすことのできない仏典となっている。しかしながら、ここでもスナール校訂本の問題が影響している。エジャートンは BHS を考察する際に、膨大な量の Mv を写本からあつかわず、スナールの校訂本を主に使用している。したがって、上記で述べたスナール校訂本の問題をそのままエジャートンが引き継いでいる点が散見されるのである。

本論文はこうした問題を解決すべく、スナールの使用できなかった Mv 唯一の貝葉写本 (Sa) と貝葉写本に劣らない読みを有する紙写本 (Sb) の読みをもとに再校訂をおこない、この再校訂テキストを使用し BHS の用例収集と解説をおこなうものである。

本論文の構成は 3 部からなっている。

第 1 部 BHS と Mv の概要

第 2 部 Mv で使用される BHS の用例収集および解説

第 3 部 ガウタマの降誕部分の和訳・テキスト校訂 (Senart, *Le Mahāvastu* vol.2, pp.1-30. に相当)

以下、この順にしたがって内容を説明する。

第 1 部 BHS と Mv の概要部分では、BHS と Mv の関係を明確にするために、これらの概説をおこなった。

BHS の概要では、BHS の定義、エジャートンによる仏典の分類、BHS と

韻律の関係を中心に概説をおこなった。BHS の定義では、エジャートンが北インドの仏典で使用される‘とある地方の方言’をもとにする不完全にサンスクリット化された‘混淆語’を‘BHS’と名付けた経緯について述べた。次に仏典の分類では、エジャートンが BHS の混淆の度合いによって仏典を 3 種に分類した内容について解説した。また、この分類がおこなわれた際に Mv が果たした重要な役割についても言及した。BHS と韻律の関係については、古典サンスクリットで使用される韻律を解説し、これをもとに仏典で使用される韻律との違いを考察した。そして、BHS において単語が韻律の制限によって語形が変化したのか、もともとから俗語が使用されていたかを如何に見極めるかが重要な問題であると指摘した。

Mv についての概要では、Mv の位置付け、Mv のタイトル、律蔵との関係、Mv のテキストと翻訳、Mv の構成、Mv の諸写本についてそれぞれ考察をおこなった。Mv の位置付けについては、Mv が大衆部の説出世部の律蔵に属する根拠を Mv の冒頭部分からテキストを引用し解説した。次に Mv のタイトルについては、水野弘元氏の先行研究を踏まえ“*Mahāvastu*”よりも“*Mahāvastu-Avadāna*”と呼ぶ方が適切であると言及した。律蔵としての Mv では、先行研究を踏まえ Mv と *Abhisamācārikā dharmāḥ* との関連性などを検討した。Mv のテキストと翻訳については、スナールによる Mv 校訂本の出版をはじめとして、2010 年に出版された平岡聡氏による和訳までを紹介した。Mv の構成では平岡氏などの研究成果を参考に Mv の全体構成を示した。Mv の諸写本については、湯山明氏の先行研究を参考に、Sb 写本と Takaoka A63 写本が同一の写本であったなど筆者が調査し新たにわかった事実を加え諸写本の解説をおこなった。

第 2 部 Mv で使用される BHS の用例収集および解説では、第 3 部であつかうガウタマの降誕で使用されている BHS の用例を中心に、エジャートンの *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar* (BHSG) の文法項目などを踏まえ写本から考察をおこなった。この際、Mv で使用される用例がエジャートンの BHSG の項目に適するようであればその用例を増やし、本論文の用例と異なる部分があればその文法項目に修正を加えた。さらに BHSG の解説に問題があると判断した場合には、その文法事項は使用できないと決定した。

ここでは本論文であつかった具体例を挙げ内容紹介としたい。

BHSG § 4.65. は saṃdhi-consonant として使用される子音 'n' をあつかった項目である。多くの北インドの仏典において saṃdhi-consonant として使用される子音は 'm', 'y', 'r' であり, エジャートンはこの 'n' の使用を希, もしくは疑わしいと解説している。エジャートンはスナールの校訂本から4箇所この用例を挙げているが, 本稿ではこのうち1つを考察していきたい。

以下がその部分である。

B 写本 : atha vā navatibhiḥ sahasrā marukamṇyā āśu-n-eva sannipatitā
(Mv 2.19.19. に相当)

エジャートンはこの āśu-n-eva 部分を saṃdhi-consonant として使用される 'n' の用例として挙げている。しかし, Mv 唯一の貝葉写本とそれに劣らない読みを有する紙写本の該当部分の読みは āśu-r-eva となっている。より古い伝承を伝えている写本の読みが 'n' ではなく 'r' となっていることから, 写本上では似た文字である 'n' と 'r' を誤写した可能性が高く, この用例は § 4.65. にふさわしくないと判断した。

第3部では, Sa, Sb 写本などの Mv の6写本を使用し 'ガウタマの降誕' 部分の和訳とテキスト校訂をおこなった。最初からではなく, 'ガウタマの降誕' 部分に焦点を当てたことについては理由がある。この 'ガウタマの降誕' 部分と '燃灯仏の物語' 部分 (*Le Mahāvastu* vol.1, pp.197-227.) はパラレル関係となっているのである。これによって, Mv 唯一の貝葉写本とそれに劣らない紙写本の読みを同じ写本から2度ずつ収集でき, 第2部で文法を考察する際により多くの情報を読み取ることが可能となったのである。

インドの仏典を研究する上で, Mv の重要性は疑いないものである。しかし, Mv は歴大であり, 使用される言語も難解であることから, 解決しなければならない問題が山積している。エジャートンの BHS においても Mv から多くの用例が収集されているが, 上記のように再考しなければならない箇所が多数ある。本論文は歴大な Mv と BHS が含んでいる問題をどのように解決すればよいのか, 上記の作業や考察をおこない, その方向性を示すものとなったと考えられる。